医甲様式２

論文審査の要旨(甲)

申請者領域･分野　氏名	総合医療・健康科学領域　　精神･ 発達医療学教育研究分野 敦賀　光嗣
指導教授氏名	中村　和彦
論文審査担当者	主　査　　大門　眞 副　査　　東海林　幹夫、　加藤　博之

（論文題目）Dietary patterns and schizophrenia: a comparison with healthy controls
（食事パターンと統合失調症：健康対照群との比較）

（論文審査の要旨）

統合失調症は人口の約１％と比較的多い疾患で、その病因としては、ドパミン仮説等が提唱されているが詳細は不明の、多因子疾患である。本症と食事内容との関連は、これまでも種々報告されているが、栄養素単位での報告が多い。申請者は、栄養素単位ではなく、食事内容のパターンと統合失調症との関連を調べる事により、新しい、また、より実臨床で利用出来る情報の発信を目的に本研究を行った。

弘前大学神経精神医学講座及び近隣の病院で受療中の統合失調症（または統合失調感情障害）の診断がついた 30-60 歳の 237 名、及び、弘前大学社会医学講座を中心とし行っている岩木健康増進プロジェクト参加した 30-60 歳の健常人 404 名を対象に横断解析を行った。食事内容は、簡易型自記式食事歴法質問票(BDHQ)を用いて調べ、主成分分析を行い、食内容をパターン化した。得られた、食事パターン毎に、三分位し、統合失調症との関連を解析した。

主成分解析の結果、２つの主成分が認められた。各摂取食物の主成分負荷量の検討から、第一主成分は野菜摂取の多寡の影響が強く（野菜型）、第２成分はお菓子やスナックの摂取の多寡の影響が強い（スナック型？申請者は穀物型と定義）ことが推察された。三分位の解析では、野菜型の高位群（野菜摂取が多い）では統合失調症の頻度は少なくなる傾向を示したが、年齢、性別で補正したロジステック解析では有意ではなかった。一方、穀物型での解析では、高位群（スナック等の摂取が多い）では統合失調症の頻度は、年齢、性別で補正したロジステック解析でも有意に高かった（OR:2.71, $p<0.001$）。本群では、総カロリー、蛋白質、脂肪摂取も多く、統合失調症の人は脂質の多い食事を好み、摂取カロリーも多いことが示された。これら食事内容と統合失調症との関連は因果関係を意味しないが、本症に多く見られるメタボリックシンドロームの予防に効果的な食事介入法を示す重要な知見であり、学位に値する。

公表雑誌等名	Neuropsychiatric Disease and Treatment, 2015; in press